

東亜大学総合人間・文化学部公開講座「千夜一夜」要旨

第二部 悪への挑戦

第5話 「祟り神」と「悪」

上原雅文（人間学研究室）

仏教移入以前の日本において、神とは自然災害や疫病などの災厄をもたらす荒々しい威力であった。神の「祟り」とは通常災いを意味するが、語源的には神の「立ち現れ」の意であり、祟りをなす荒々しい威力を神の本質と見なしていたのである。しかし、「祟り神」の威力は生命の根源でもあり、存在を豊かに生成させる自然の不可思議な威力でもある。すなわち神は善悪において両義的である。人々が行う神の祭祀とは、神を迎えてもてなし和めることによって、その威力を五穀豊饒・天下太平などをもたらす威力へと転化させようとする行為であった。このような信仰土壌の日本に、6世紀、仏教が伝来した。仏教は衆生（生きもの）を苦悩する存在として捉え、衆生個々の内面的な煩悩（無知、愛欲、怒りなど）を苦悩の原因とする。そして衆生に対して、存在の真実を知ることによって煩悩を克服し、仏という絶対的な幸福を目指すべきであると説く。8世紀に「苦しむ神」が登場する。すなわち神が、神身に転生して苦しんでいるので仏法によって救ってほしいと託宣するのである。人々は、日本の神々を衆生の1つと見なし、祟りの根源に神の煩悩を見いだすようになった。そして従来の祭祀に加えて神に読経などの法会を行うことで、神に仏教を伝えて神の苦悩を和らげる祭祀儀礼が生じた。その後9世紀頃に「御霊信仰」が成立す

る。災害を、恨みを抱いて死んだ人間の靈魂の祟りと見なし、祟り神と見なされた靈魂を祭ることによって靈魂を鎮め、豊饒をもたらす神へと転化させようとする信仰である。人々は祭祀によって、靈魂の怒りをなだめつつ、仏法の知によって、祟り神となった靈魂を善へと方向づけようとした。この信仰は、「苦しむ神」の概念を媒介にして生じたと見ることができる。

ここで、新たな善悪観が成立した。すなわち、人間における煩悩という根源的な悪（怒り・愛欲）を断罪し消滅させるのではなく、祟りを想定したように靈魂の抱く願望を一時的には満たさせようとする。そしてそのことによって靈魂を鎮めて和らげ、同時に知によってその悪を自覚させ、自覚させることで悪の力を善へと転化させるという善悪観である。

このような善悪観は、祟り神信仰の土壌に仏教が移入されたことで成立したのであるが、儒学や国学、近代思想においても、根強く繰り返し登場しているのである。

第6話 犯罪に挑む心理学

——犯罪の現場から——

平伸二（人間学研究室）

犯罪心理学が大変な人気である。これは神戸児童連続殺傷事件や地下鉄サリン事件などの凶悪犯罪、あるいは、児童虐待、ストーカーなどの生活に密着した犯罪の急増が、犯罪者の心理を知りたいという人々の好奇心を喚起した結果と考えられる。

特異な犯罪が起こった場合、人々は一言で納得できる原因を知りたがる。これは原因がわかれば、新たな犯罪を予期することができ（予期

可能性)、犯罪も予防することができる(統制可能性)と期待するからである。つまり、予期可能性と統制可能性を確認することで、自分に対する犯罪不安の低減を図っている。しかし、犯罪者が犯罪に至る心理は、複数の要因が絡み合っていて一言で説明できるものではない。また、犯罪は一部の異常な人による行為ではないため、様々な立場の人々が現場で犯罪という「悪」に挑み続けているのが現状である。

犯罪心理学の現場は、捜査機関、司法機関、矯正機関に大別できる。捜査機関は科学捜査研究所の研究者(ポリグラフ検査、プロファイリング)、司法機関は家庭裁判所調査官、矯正機関は刑務所、少年院、少年鑑別所の法務技官に代表される。この他にも、児童相談所や保護観察所などでも心理職の人々が活躍している。

犯罪の現場では、常に加害者と被害者という人間が存在する。そして、加害者には刑罰、被害者には心の支援が必要である。そのため、犯罪に関連した心理職には、①専門職として自らの仕事の結果に対して責任を持つこと、②研究活動を通じて最新で高水準の職業的能力を維持すること、③自らが道徳的・法的規準を遵守すること、④人権への配慮と秘密保持を厳守すること、⑤他の専門職の能力や義務を尊重し、独善的な判断に陥らないこと、⑥偏見や先入観にとらわれず、真実を解明する真摯な態度を常に持ち続けること、そして、⑦何よりも人間を愛する心を持つことが求められる。

犯罪の増加傾向が見られる今日、犯罪という「悪」に挑む若い力が必要とされている。

第7話 パンドラの箱が開いた!

——ギリシア神話が語る悪——

後 藤 淳(人間学研究室)

農民詩人と呼称されるヘシオドスの二つの作品『神統記』『仕事と日々』の中に描かれたプロメテウス・パンドラ神話を通観することによ

り、彼の世界観に占める人間の位置と、彼が説いた愚直な生の意味について考える。

ヘシオドスの二つの作品においてなぜパンドラ神話に取り上げられているかについて考えることは、神話内挿話での彼女の役割を見抜くことになり、さらには「希望(エルピス)」という言葉に彼が込めた人間の生、報われることの少ない労苦の塊である人間の生に想いを巡らせる端緒となるであろう。

そもそもパンドラ<パン=すべてを+ドラ=贈られた者>という女性は、プロメテウスが人間を想ってゼウスに挑戦するものの敗北したために、罰として人間たちに贈られた厄災・悪である。彼女は、神と人間との懸隔を越え出ようとする「傲慢さ(ヒュブリス)」に対する強烈な、そして可視的な科料である。人間は本来の「分(モイラ)」を甘受することしか許されない存在である。犬の心と不実の性を持つパンドラが甕<オリジナルは箱ではなくて甕である>を開けてすべての禍を撒き散らすことは、ゼウスにとっては自明である。問題は、甕の中に残ったとされる「希望」をどのように解釈するかに存する。

ひとつは、それが「甕に残った」以上、甕の外で生きる人間には希望など与えられていないとする解釈である。これは希望の存在を全否定するものであるがゆえに、人間の悲惨さが増幅されることになるであろう。

もうひとつは、甕自体を人間とみなすことで、人間の内部にのみ希望は存するとする解釈である。神にも獣にも希望は必要ないものである。希望を「人間の隠されたモイラ」と捉えることで、生きるという営為での希望の意味を説くことができるであろう。

これら二つの解釈のうちでいずれをとるかによって、パンドラ神話の基本的解釈が相違するであろう。しかし、ヘシオドス自身はその決定をわれわれに委ねながら、彼の人間観や労働観を淡々と語るに留まる。彼によれば、パンドラが持ち込んだ不幸は多くとも、それでも人間は苦しい勤労を通して幸福を発見できるのであり、それは神によっても嘉されうる。またパン